

エッセイ、2

日本で初めての『アラブ語辞典』を発刊した川崎寅雄

月刊誌『潮』8月号からの紹介

桜井良 NPO 法人「社会総合研究所」会員

はじめに

川崎寅雄？ 誰？ 何をした人？ 「アラブ調査室」に掲載されているさまざまな論文・エッセイ・書籍紹介の読者にとって、初めて聞く名前かもしれない。あるいは、見覚えがあつたり、懐かしがつたり、お世話になったりと、記憶の片隅に残っている読者もいらっしゃるかもしれない。というのは、日本初の『アラブ語辞典』を作った人だから。私自身は、お会いしたことはない。

7月上旬のある日、月刊誌『潮』8月号を読んでいたら、ドキュメンタリー企画「民衆こそ王者 アラブとの友好の道」という記事(注1)が目に留まった。ご存知のように、月刊誌『潮』は創価学会系の出版物である。8月号のその記事は、川崎寅雄の生涯と、『アラブ語辞典』が出版されるに至った経緯について触れている。

川崎寅雄を初めて知った20数年前

私が初めて川崎寅雄という人を知ったのは、20数年前、小説『新・人間革命』(聖教新聞社)第6巻の「宝土」を読んだときである。1962年(昭和37年)1月、SGI(Sokka Gakkai International)会長の池田大作氏(小説では山本伸一として登場)が、初めてイラン・イラク・トルコ・エジプトの中東を歴訪する。それに先立ち、当時、東京外国語大学でアラビア語の教鞭を執っていた川崎寅雄氏(小説では河原崎寅造として登場)に会い、中東の歴史や風土、イスラームなどについてアドバイスを受けた(注2)。そして、この対談が契機となり、後述するように、川崎寅雄氏が日本で初めての『アラブ語辞典』を執筆・編集し、発刊することに繋がっていく。

川崎寅雄氏の生涯

本稿2ページ「① 青年時代と中東赴任」から8ページ「一枚の写真」までは、『潮』8月号「民衆こそ王者 アラブとの友好の道」124~139ページに綴られた川崎寅雄氏(以下、寅雄と書く)の生涯を、潮出版社の許可を得て要約したものである。したがって、出典はすべて124~139ページ。ただし、見出しが私が独自に付けた。

また、これから紹介する書籍の表紙については、「民衆こそ王者 アラブとの友好の道」に掲載されていなかったので、私がAmazonなどを調べて転載し、出典先は「注」に示した。

① 青年時代と中東赴任

寅雄は、第一次世界大戦が勃発した1914年（大正3年）、茨城県久慈町（現・日立市）の漁師の網元の家に生まれた。子どもの寅雄は飛びぬけて勉強ができたが、父・丑松（うしまつ）からは、「寅坊、漁師に学問は要らんよ」と言わされて中学進学は諦めていた。しかし、小学校の担任が丑松を説得し、中学に進む。この時期、丑松が手を出した商売が失敗し、家計はどん底へ。寅雄は父が兼業した農業を手伝い、ときには大八車を押しながら、目をこすって勉強を続けた。

やがて名古屋高等商業高校（現・名古屋大学）に合格。家には一切の迷惑をかけないと誓い、すべての学費を免除されるという優秀な成績で卒業した。三年生のとき、外務省留学生試験に合格し、入省。21歳でエジプトの国立カイロ大学に留学した。

時代は、日中戦争に突入しつつあった。カイロ大学を卒業後はアラビストの草分けとして、エジプト、レバノンなどに赴任。アラビア語圏で悪戦苦闘の日々を過ごす。イラクの公使館に勤めていたときに長男・茂元が生まれ、茂元は“バクダードで生まれた初めての日本人”になった。

② 敗戦後のインドネシアでBC戦犯の弁護

その後、日本に戻るが、太平洋戦争の敗戦1年前の1944年（昭和19年）、海軍司政官としてインドネシアに派遣された。インドネシアは大半がイスラーム教徒なので、日本政府は人心掌握のために、イスラームをよく知り、アラビア語の専門家である寅雄を派遣したと思われる。そして、敗戦をインドネシアで迎え、その後、セレベス（スラウェシ）島で2年間以上も留まることになる。

やがて、同胞である100人近い日本の軍人は、BC級戦犯の容疑をかけられ、裁判が始まても、日本政府は弁護団を送ってこなかった。裁判は旧植民地宗主国オランダ語で行われ、弁護団もないままでは、厳しい判決が下されるのは明らかである。

寅雄の肩書は司政官、つまり文民だったので、妻や子どものいる名古屋に早く戻ることは可能である。しかし寅雄は、容疑者を見捨てるわけにはいかなかった。敗戦から10ヶ月後、家族の待つ日本へ向けて最後の引き揚げ船がセレベス島を出航したが、寅雄は乗船しなかった。残ったのは戦犯容疑者98人、そして日本政府が弁護団を寄越すまで弁護を買って出た寅雄たち13人の”弁護人“だけだった。もちろん、報酬など出るはずもない。寅雄は、英語・ドイツ語・フランス語は堪能だったが、オランダ語は知らなかつたので、急ごしらえで学び、法律を頭に叩き込み、四面楚歌の法定に臨んだ。



「南方戦犯弁護団員の手記」（注3）

無償の弁護は1年半に及んだが、それは孤立無援の戦いだった。次々に死刑判決が下され、牢獄で自ら命を絶つ被告もいた。それでも寅雄たち弁護団は減刑の嘆願書を書き続け、銃殺刑の場にも立ち会った。たとえ正式な弁護人であっても、銃殺刑に立ち会う義務はないのだが・・・。こうした日々の記録は、「南方戦犯弁護団員の手記」（遊学文庫）として残されている。戦時史研究家の高崎隆二是、これは戦争証言として第一級の価値があり、学ぶべきことや考えさせられることが無数にある、と評価している。そして、「川崎寅雄は、こうした行為を弁護人の責務として自らに課したの

であり、それは氏の強烈な人間愛の精神にもとづく行動だったのだろう」と述べている。

寅雄が日本の土を踏んだのは、敗戦から三年が経っていた。寅雄の長男・茂元は、こう回顧している。「当時の外務省は、父が戦犯を弁護したことにノー・サンキューという反応でした。命令したわけでもないのに、勝手なことをしたという論理でした。そうしたことから、父は帰国してすぐに外務省を辞めました」。

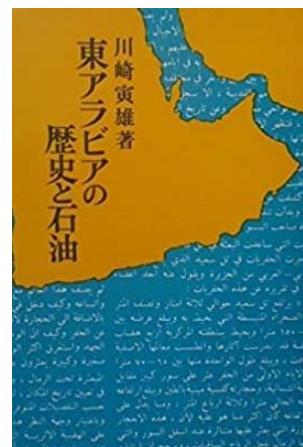
③ アラビア石油の駐在員として中東へ

寅雄の名古屋の家は空襲で焼け落ち、妻と二人の子どもは肺結核で苦しんでいた。寅雄は、名古屋の米軍基地で通訳の仕事をしたり、映画雑誌の営業をしたりと、なんとか糊口をしのぐ日々。やがてアラビア語が堪能だということでアラビア石油から声がかかり、クエートやイラクの駐在員として海上油田の開発に携わる。それは戦後の日本初の挑戦であり、のちにNHKの人気番組「プロジェクトX」でも取り上げられた。



寅雄がアラビア石油で仕事をしていたときの経験をもとに書いた書籍。

左:『ペルシア湾 真珠と海賊と石油と』(注4)
右:『東アラビアの歴史と石油』(注5)



その一方、通訳として政府要人や財界人の会見を何度もこなした。長男・茂元によれば、寅雄が家に帰ってくるなり、「なんだあいつは。偉そうにしているが結局、自分のことばっかりじゃないか」と嘆くことがしばしばあったという。

④ 池田大作氏との出会い

前述したように、1962年(昭和37年)1月、池田大作氏は中東歴訪の旅に出る。出発の直前、東京外国語大学でアラビア語を教えていた寅雄は、池田氏と会った。この語らいが、日本で初めての『アラブ語辞典』に繋がっていく。

「池田先生、私は『アラブ語辞典』を作りたいんです。日本には、まだ一冊もないんですよ！ これでは、アラビア文化のことがわかるはずがありません。英語やドイツ語、フランス語の辞典は、いくらでもあるのに、あまりにも偏りすぎています。

アラブ世界は、地球の巨大な部分を占めているんです。その人たちが、どんな考えを持っていて、どんな気持ちで暮らしているのか。それが全然わからないというのでは・・・。日本人の世界地図は、ひどく、ゆがんでいると思うのです」。

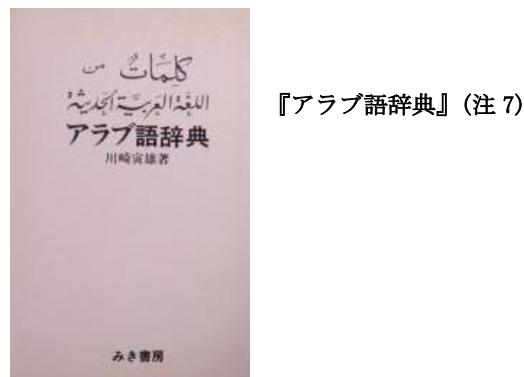
池田は「その通りです。私も、それを心配しています」と応じた。続けて池田が言った一言に、寅雄は目を見張った。

「ちょうど、きょう、たった今、『東洋学術研究所』（現・東洋哲学研究所）（注 6）の発足式をしてきたばかりなんです。これは、世界の文化や思想・宗教を研究する機関です。もちろん、アラビア文化、イスラーム哲学も入ります」。そして池田は、寅雄に、必ず『アラブ語辞典』を完成させてほしいと励ました。

寅雄は、池田と話をしているうちに、自分の頬に大粒の涙が筋を引いているのに気づいた。心の内に何か変化が起きたようだった。

⑤ 『アラブ語辞典』の発刊

寅雄は、「池田先生との約束だから」と言って、翌 1963 年、『アラブ語辞典』を自費出版で世に出す。長男・茂元の回想。「池田先生は父にとって、自分のアラブに懸けてきた愛情を、初めて、心の底から理解してくれた人でした。おそらく最初で最後の人でした。だからあれほど『アラブ語辞典』の出版に情熱を傾けたのです」。



しかし、出版に至るまで、さまざまな苦労があった。辞書を作るといつても、そもそも「アラビア文字の活字」は、日本のどこにもなかった。そこで寅雄は、「写植」方式を選ぶ。まず、アラブ諸国的小学校に依頼して、大量の教科書を取り寄せた。そして、「奉仕する」「価値がある」などの日本語をページの左側に印刷し、その言葉に該当するアラビア語を教科書から探し出して、ページの右側に貼っていくのである。面倒極まる手作業。一日の仕事を終えてから、こつこつと続けた。家族も手伝った。家が一軒建つほどの金額をつぎ込んだという。夫人の実家からも借金した。そしてついに、日本初の『アラブ語辞典』が完成した。

その後も寅雄は、『アラビア語入門』『最新 日・ア辞典』を完成し、「アラビア語の三部作」として不滅の光を放っている。多くの後進が、これらにどれほどお世話になったかわからない。

⑥ 創価大学でアラビア語を教える

実は、寅雄は池田氏ともうひとつの約束をしていた。それは、1971 年に八王子で開学する創価大学（以下、創大と記す）の創立準備だった。寅雄は、創大の設立準備委員会の一員として 3 年間、携わった。当時、寅雄は東京外国語大学の助教授だったので、周りから「もうすぐ教授になれるのに、一体何を考えているのか」といわれたそうである。しかし、「池田先生との約束だから」と言って意に介さなかった（注 8）。

創大一期生の浅子さやかは、寅雄の授業で見事なアラビア語を耳にし、「なんと美しい言葉か」と胸を打たれた。なんとしてもアラビア語を深めたいと思い、経済的に厳しい中、アルバイトをしながら、授業とは別に三鷹市のアジア・アフリカ語学院に通った。

創大の図書館職員だった柿沼達郎。「当時、私は教員の研究図書の購入と、その蔵書登録を担当していました。しかしアラビア語の本のカード目録は書けなかった。すべて川崎教授にお願いしました。そこでアラビア語の授業を受けたのですが、歯が立たなかった」と苦笑する。「授業中に、ふとした時に『南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）を止めさせないと大変なことになる』と熱く語っていたことが印象に残っています。まだ日本では南アの実態がほとんど知られていない時代でした」。

寅雄の研究室で『最新 日・ア辞典』の編集を手伝っていた創大二期生の宮崎康明の述懐。「日本で最初の“日本語からアラビア語が引ける辞書”を作るんだ」と言われていました。『最新 日・ア辞典』も自費出版でした。

「よく研究室でアラビア語の音楽や歌をカセットテープで流して、口ずさみながら、即興で歌詞を翻訳されました。特にある女性歌手の歌を流すことが多かったです。私は創大を卒業後、エジプトのカイロに語学留学したのですが、現地で暮らしていると、ラジオでもテレビでも至る所で、研究室で聞いたあの歌が聞こえてきて驚きました。その歌声の主は、ウンム・クルスームというアラブ世界では知らない人はいない歌姫だったのです。実際にカイロに行ってから、川崎先生は八王子の研究室で、はるか彼方のアラブの詩心を教えてくれていたんだと気づきました」。

またこの時期、創大の学生だけでなく、外務省の依頼により、外務省の語学研修生にアラビア語を教えてもらっている。

寅雄は、アラブについての日本人の無認識を嘆いた。寅雄のもとで学んだことのあるひとりは、こう語っている。「先生は、学生にもよくこう語られた。日本ではアラブと言うと恐いイメージがあるがとんでもない。あんなんなつっこい人たちもいないよ。真面目だし勤勉でもある。東洋や西洋とは文化が違うから初めはとまどう人もいるかも知らんが、習慣の違いなんかちっぽけなことです。みんな同じ人間、泣いたり笑ったりして暮らしている。みんな平和を願っているし、楽しい暮らしを願っている。そもそもイスラームとは平和という意味なんですよ」。

寅雄は、創大創立者の池田大作氏が創大を訪問すると、必ず話し合ったという。池田氏は、寅雄との語らいの節々を書き留めている。

- ・ アラビアにも冬があるし、雪だって降るんですよ。
- ・ 砂漠といつても、砂というよりは土です。
- ・ イスラームは砂漠の宗教ではありません。むしろ多様な人が行き来する都市で生まれた宗教です。
- ・ コーヒーも、シュガーも、アルコールも、アルカリも、シロップも、モスリンも、ギターも、ソファーも、もとはアラビア語なんですよ。みんな文明用品ですね。おっと、日本語と思われている「ジュバン（襦袢）」も「ジョーロ（如雨露）」も、ポルトガル経由のアラビア語です。

⑦ 創大・夏期講習会での熱弁

寅雄が教授として力を入れたのは、学生向けの授業だけではなかった。1973年（昭和48年）に始まり、今日に至るまで続けられている一般市民を対象にした「創大・夏期大学講座」でも、アラブ

を紹介する講座を持った。「シルクロードのアラブ人」「近代アラブ文学学者群像」「アラブ諸国と中東の平和」などなど。毎年、違うテーマを考え、熱弁を振るった。



創価大学大在籍中に発刊した『アラブの文学』(注9)

参加者が「今日は創価大学に来てよかったです」と満足して家路につけるように、研究の最先端を惜しみなく注いだ。寅雄の講座は笑いが絶えなかった。

「喜々として創価大学にやってくるおじさん、おばさんを見ると、なんと尊い姿か。抱きしめたくなります。池田先生、創価大学は本当にすごい大学です。庶民がこんなにうれしそうに勉強していますよ」。

⑧ 寅雄の勲章

1976年（昭和51年）8月の暑い盛りに、寅雄はこの世を去った。63年の波乱万丈の人生だった。創大は、文学部葬で寅雄を弔った。池田氏は、寅雄がキャンパスの片隅で、しみじみ語った言葉を忘れないという。

「池田先生、私にとっては、どんな博士号よりも、文化勲章よりも、地位よりも、学生が喜び、満足してくれたなら、それが私の勲章です。私は、学生から慕われ、尊敬されたという勲章を胸に下げて一生を終わりたいんです。先生はアラブとの友好の道を拓いてくださっただけでなく、創価大学の教員としての正道をも示してくださいました」。

創大に在籍していた期間は、わずか6年。しかし、「一生分の仕事が八王子でできた」と寅雄は語っていた。

世界初のペルペル語の文法書を発刊した石原忠佳の思い出

寅雄の教え子からは、陸続と中東で活躍する人材が育っていった。そのひとりに、創大で「アラビア語」や「中東文化論」などを担当している文学部教授の石原忠佳（いしはら ただよし）がいる。

「留学していたスペインやエジプトで日本人に会うと、『アラビア語は川崎先生から教わりました』という人が何人もいて驚きました」。

「創大では今、アラビア語の授業は第二外国語として選ぶことができます。しかし、川崎先生の時代は自由聴講科目でした。つまり、授業を受けても単位にはならなかったんです」。それでも石原忠佳は、寅雄の強烈な人間性に魅了され、授業に通った。

大学三年生の夏、スペインの国立グラナダ大学へ留学。寅雄からも、そして創立者の池田氏からも励まされ、日本を旅立った。スペイン語をはじめラテン語、アラビア語、フランス語、ヘブライ

語を習得。グラナダ大学では外国人初の卒業生となった。

後年、石原忠佳は世界初となるスペイン語による日本語の文法書を発刊する。そして、当時の在スペイン日本大使が序文を寄せてくれた。

石原忠佳は語る。「川崎先生は、教え方がうまい、とかじやないんです。それまで見たこともないスケールの人だった。先生とのふれあいの全体が、”1個の授業 “のようでした」。

「川崎先生の心を動かしたのは、紙に書かれた理念ではなかった。創立者との1対1の対話です。創立者は、川崎先生の本質を見抜かれたのでしょう。川崎先生もまた、創立者に惹かれた。そしてそれまでの立場や地位を捨て、新しい時代を拓くパイオニアとしての道を選ばれたのだと思います」。

「私は川崎先生に『日本にいたらアラビア語は勉強できないよ。早く現地に行きなさい』と背中を押されて留学してから、北アフリカを何度も旅したのですが、モロッコで使われているアラビア語がまったく理解できませんでした。エジプト人に聞いても『彼らのアラビア語はわからない』という。それまでモロッコ・アラビア語はアラビア語の方言だと思っていましたが、そうではありませんでした。北アフリカには、3000年前から暮らしていた先住民族がいて、今は『ベルベル人』と呼ばれています。彼らがアラブに支配され、アラビア語とベルベル語が混ざり合って、文法も発音もまったく異なる言語が生まれたのです。そのことを知ってから、私はベルベル語の研究を始めました」。

石原忠佳は、2014年、ベルベル文字を取り入れた、世界初のベルベル語の文法書「ベルベル語とティフィナグ文字の基礎」（春風社）を発刊。現在は、“世界で初めてのベルベル語辞典”を手掛けている。

一枚の写真

寅雄が亡くなつて15年後の1992年6月、川崎家に一枚の写真が届いた。送り主は池田氏。池田氏がエジプトで撮った写真だ（注10）。

寅雄から旅のアドバイスを受け（1962年1月）、初めてエジプトを訪れてから、ちょうど30年ぶりの訪問だった（注11）。撮った写真は、ギザの「三大ピラミッド」のひとつ、「カフラー王のピラミッド」。手前に草が生い茂っている。“今を生きる”みずみずしい緑と、“永遠を生きる”ピラミッドの対照が鮮やかな一枚だった。「川崎先生を偲んで、砂漠で祈りを捧げました」と伝言が添えられていた。

寅雄のアラビア研究を支え続けた妻・曜子は、寅雄が青春の日々を過ごしたエジプトの地から届いたその写真を、寅雄が使っていた部屋に飾った。「夫が帰ってきたように感じます」。池田氏にそう伝えた。

“不滅の業績”を意味する「金字塔」は、ピラミッドから生まれている。

あとがき その1 「意外な人間関係のつながりを知る」

こんにちの日本におけるアラブやイスラームの研究には、多くの若い人材が育っている。そしてその進展には、実に多くの方々が先駆の道を切り拓き、礎を築いてきたからだと想像する。その一人には川崎寅雄という人物がいたという事実を知りたいと思い、このコラムを書いた。

草稿がほぼ出来上がった後、私は2部プリントした。

1部は、転載の許可を得るために『潮』出版社に送った。

もう 1 部は、ひょっとすると川崎寅雄を知っているかなと思い、社会総合研究所理事の石原義一さんに送った。私は以前、エッセイ『サブ添乗員のエジプト旅』を「アラブ調査室」に投稿させていただいたが、このエッセイの中で「I さんは東京外国語大学でアラビア語を学び、その後、カイロに留学して磨きをかけた。就職してからは中東やインドネシアなどのイスラーム圏で仕事をしてきた・・・・」(注 12) と紹介したその方が、石原義一さんである。



私が家族を連れてエジプトを旅した
2019年12月、ギザの丘から三大ピラ
ミッドを眺望。

すると、なんとなんと、知っているどころか、川崎寅雄は石原義一さんの東京外国語大学時代の恩師であり、しかも結婚式の仲人をしてもらったというではないか!! そしてさらに、前述した創大文学部教授の石原忠佳さんとは若い時代の 1977~1978 年頃、一緒にカイロでアラビア語を学び、寝食を共にした仲間というではないか!! 同じ仲間に、社会総合研究所が開催した講演会で「混迷を深める中東」(2018 年 11 月 3 日) というテーマで話をしてもらったこともある遠藤茂さんも一緒だったという。遠藤茂さんは、早稲田大学を卒業して外務省に入省し、カイロでアラビア語を学んだ。元駐サウジアラビア王国日本国特命全権大使を務めこともある。したがって、石原忠佳さんや遠藤茂さんがカイロで勉強していた当時、同じくカイロで仕事をされていた塩尻宏・和子ご夫妻と面識があると思う、というではないか。

脱線するが、私がすでに社会人だった 22 歳のとき、UCLA (University of California at Los Angeles) で開催された夏期語学研修に参加したことがあった。まだ早稲田大学の学生だった遠藤茂さんも参加していた。クラスは違ったが、UCLA の寮生活やカフェテリアなどで一緒だったので、よく覚えている。

私が川崎寅雄を紹介する文を書いたことによって、こうした人間関係の繋がりを知るなんて…。不思議だ。

あとがき その 2 「塩尻和子氏からのメール」

7 月中旬、事前に間違いの有無や書式についてアドバイスを受けるため、草稿段階の原稿を塩尻和子氏にお送りさせていただいた。塩尻氏からは、いくつかのご指摘を受けた後、次のような感想をいただいた。

大変興味深い原稿をお送りいただきまして、ありがとうございました。

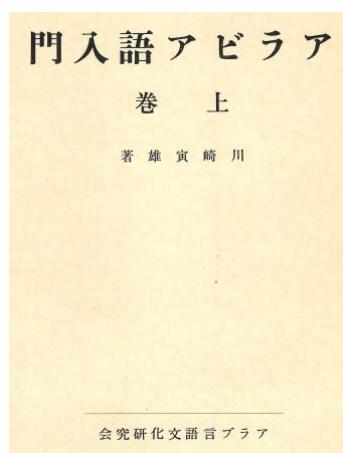
川崎寅雄先生については、夫は何度かお目にかかる、いろいろなお話を伺ったことがあるようですが、私はお名前しか存じません。

私の夫・塩尻宏は、大阪外国語大学（現・大阪大学）でアラビア語を専攻していた4年生のときに、外務省の語学研修生試験をアラビア語で受験しました。本人としては、アラビア語での受験を認めていた外務省の試験を受けたのは単に力試しをしたかっただけだそうです。後で聞いたところでは、外務省のほうでは、塩尻がアラビア語で受験して合格した初めての研修生ということで興味を持たれたようで、すでに就職が内定していた企業に外務省のほうが断りを入れて、外務省に入ることになったとのことです。1967年のことです。軽い気持ちで受験したことから人生の道筋が変わってしまったと言っています。

当時の語学研修生は現地研修への出発前の3か月間、国内で赴任前研修を受けました。その際、塩尻のアラビア語講師としてこられたのが、川崎寅雄先生でした。その年のアラビア語研修生は塩尻だけでしたので、まさに一対一の講義になりました。それまでの研修生はアラビア語をまったく知らないまま入省していましたので、アラビア語がどんな言葉かというところから習っていったようです。塩尻は川崎先生が用意した教材の内容のすべてはすでに習得していましたので、入門者レベルのアラビア語については新たに教わることはませんでした。そのため、アラビア語についての授業自体はほとんどなく、アラブ諸国での先生の体験談などを伺うことで過ごしたと申しております。夏場の暑い時期でしたので、先生は、毎回、アイスクリームを2つ買ってこられて1個を塩尻に勧め、二人でアイスクリームをいただきながらいろいろな話をされたそうです。

川崎先生のご著書は何冊か自宅にあったのですが、今、少しずつ終活をしておりまますので、『アラビア語入門上巻』の一冊しか残っておりません。『アラビア語入門』は桜井様の原稿に掲載されていませんので、ここにスキャンしてお送りします。1964年出版で非売品となっています。

この『アラビア語入門』では、日本語で書かれた解説が、アラビア語の書き順と同じく、すべて右から左へ書かれています。川崎先生のご著書以外では今日まで、アラビア語教本の中の日本語は左から右へと書かれていて、それで何ら不自由はしていませんが、こういったところにも、川崎先生の「アラビア語愛」が溢れているのでしょう。



塩尻氏のメールに添付されていた『アラビア語入門上巻』の表紙。

受け取ったとき、「アレッ、なぜ右から書いてあるのだろう?」と一瞬思ったが、上記の説明を読んで納得しました。
1964年出版となっているので、『アラブ語辞典』の翌年になる。

『アラブ語辞典』については、私どもが大学でアラビア語を学び始めたころには、

英語・アラビア語と亜亜辞典の優れた辞書が数種類、出版されていましたので、日本で出版された辞書を使うことはありませんでした。それは残念なことに、今でも変わっていません。アラビア語を学ぼうという人は、基本的な英語がてきて当然、という気持ちが今もあるからでしょう。

桜井様も遠藤大使をご存じだったのですね。遠藤大使はカイロで1年だけ研修をされて、その後はロンドンに移られました。とても温厚で勉強家の方です。石原忠佳先生については、お目にかかったことがないのですが、いつかお目にかかるときがあれば、うれしく思います。

このお二人がカイロにいらしたころ、私どもも一家でカイロに赴任していました(1975-1978)。夫はカイロで研修を受けていた外務省の若い研修生の監督を命じられていきましたので、我が家は彼らのたまり場になっていました。

1992年4月に池田会長がカイロをご訪問になられましたが、その直前のことです。夫は当時、カイロの日本国大使館広報文化センターの所長をしていましたので、会長ご訪問の準備のために学会からカイロへいらした副会長たちご一行のお世話をして、会長がご訪問になられる場所や人々との面会の準備を整えてから、一足先に4月初旬にカイロからボストンへ転勤をいたしました。このことは以前、お話ししたかと思います。

その後、1993年9月に池田会長がハーバード大学の講堂でご講演をされたときに、副会長からご招待をいただき、夫婦で初めて池田会長のご講演を伺いました。大乗仏教と死生観についてのご講演だったと思いますが、忘れられない思い出です(注13)。

桜井さんの書かれた物語は、池田会長、川崎先生、東洋哲学研究所などのご縁によって、アラビア語を学ぶ多くの人々が一本の線でつながっていくという系図になっていて、とても感動的です。うれしいご寄稿になりました。

我が国の「アラビア語事始め」の時代に活躍された川崎寅雄先生について、『潮』8月号の記載から生き返させていただき、多くの人々が、きっと懐かしい気持ちになられることと思います。「アラブ調査室」のHPを読んでくださる方々も、きっと興味を持って下さると思います。

前回の「サブ添乗員のエジプト旅」のエッセイは、多くの方から「楽しいエッセイ」という声が寄せられました。池田会長がご覧になったクフ王のピラミッドの前でお孫さんたちがポーズをとっている写真は、忘れられない素晴らしい思い出の一枚になったことと思います。

また、いろいろなトピックを見つけて、ご投稿をお願いいたします。

注

- (1) 月刊誌『潮』8月号 通巻750号 潮出版社 2021年8月1日発行。
「民衆こそ王者 アラブとの友好の道」は116~139ページに掲載されている。
- (2) 『新・人間革命』第6巻 聖教新聞社 出版年は1999年。
第6巻「宝土」の7~19ページに山本・河原崎のふたりの対話が記載されている。
- (3) 『南方戦犯弁護団員の手記』 遊学文庫 出版年不明。

表紙は「日本の古本屋」のサイトから転載。

- (4) 『ペルシャ湾 真珠と海賊と石油と』 石油評論社 出版年は 1959 年。

表紙は Amazon の書籍案内サイトから転載。

- (5) 『東アラビアの歴史と石油』 吉川弘文館 出版年は 1967 年。

表紙は Amazon の書籍案内サイトから転載。

- (6) 「東洋哲学研究所」 創立 1962 年 財団設立 1965 年 公益財団法人認定 2010 年。

創立者・池田大作 現所長・桐ヶ谷章 所在地・東京都八王子市

この「注」を書いて、思い出したことがある。2016 年 9 月、「社会総合研究所」が塩尻和子氏をお招きして講演会「イスラームを理解するために -相互理解と対話をを目指して-」を開催したとき、東洋哲学研究所の現在の所長をしておられる桐ヶ谷章氏にも来ていただいたことがあった。当時は、創価大学法科大学院の学部長。講演終了後の懇親会では、桐ヶ谷氏を塩尻氏に紹介した。そして、塩尻氏が編者をされ、発刊されたばかりの『変革期のイスラーム社会の宗教と紛争』(明石書店) の扉に塩尻氏の著者サインをいただいたことがあった。

- (7) 『アラブ語辞典』 みき書房 出版年は 1963 年。

表紙は Amazon の書籍案内サイトから転載。

- (8) 『潮』8 月号の 125 ページには、創大の研究室で撮られた笑顔の川崎寅雄の写真がある。しかし、写真の著作権は潮出版社ではなく、潮出版社の編集部が著作権者に利用申請を行って掲載している。したがって、私が著作権者に無断で二次利用できないので、残念ながら掲載できない。

- (9) 『アラブの文学』 みき書房 出版年は 1975 年。

表紙は Amazon の書籍案内サイトから転載。

- (10) 『潮』8 月号の 139 ページには、池田氏が撮影し、川崎家に送ったピラミッドの写真がある。しかし、(注 8) と同様、写真の著作権は潮出版社にはない。私が著作権者に無断で二次利用できないので、残念ながら掲載できない。

- (11) 最初のエジプト訪問 1962 年 1 月から 30 年後の 1992 年 4 月、池田氏は当時のムバラク大統領やホスニ文化大臣と会見。また、カイロ・オペラハウスから「エジプト文化象徴賞」を受賞している。そして、カイロ大学と創大の学術交流協定を結んだ。ピラミッドの写真は、たぶん、その折に撮影したと思われる。

- (12) 「アラブ調査室」7 月号のエッセイ『サブ添乗員のエジプト旅』の 3 ページ。

- (13) ハーバード大学での講演は、1993 年 9 月 24 日、文化人類学者ヌール・ヤーマン教授、宗教学者ハービー・コックス教授、経済学者ジョン・ガルブレイス名誉教授などの招聘で開催された。テーマは『二十一世紀文明と大乗仏教』。150 人を越える幅広い研究者が集った。大乗仏教の観点から死の問題と向き合う必要性を真正面から問い合わせ、希望と平和の世紀をつくるための方途を展開した。



ハーバード大学での講演の模様。多数の出席者のどこかに、塩尻ご夫妻がいらっしゃるんですね。

SOKA net から転載。